

第7章

「寒証」治療の鉄則

●「寒証」は原因によって病態を分類する

「寒証」には外因による寒証と内因による寒証がある。

外因の寒証

外部環境の寒冷刺激で生じるものを、「外因の寒証」、「中寒」と呼ぶ。中寒は、極寒の地域だけにみられるものではなく、冷たい飲食物の摂取によってお腹を冷やしたときや、水中作業、寒冷の環境、冷房、外気の寒冷等の作用を受けてしばしば発する。そして「表」即ち身体外部の中寒を「経絡の中寒」と呼び、「裏」即ち内臓の中寒を「臓腑の中寒」と呼ぶ。

【経絡の中寒】……身体外表の寒証

寒冷刺激が四肢・軀幹など外表（経絡）を侵して発症する。

（代表方剤）五積散、当帰四逆加呉茱萸生姜湯

【臓腑の中寒】……内臓の寒証

① 下肢の血液の寒冷（臓腑の寒証⇔経絡の中寒）、飲食物による寒冷作用などで、内臓が冷えて発症する（中焦の寒証）

（代表方剤）人参湯

② 呼吸器の寒証（肺中冷、上焦の寒証）

（代表方剤）小青竜湯、苓甘姜味辛夏仁湯

③ 下腹部・腰部の冷え（下焦の寒証）

（代表方剤）苓姜朮甘湯

臓腑の中寒では上焦（＝肺中冷）には小青竜湯や苓甘姜味辛夏仁湯を、中焦の冷えには人参湯類を、下焦の冷えには苓姜朮甘湯を用いる。いずれも乾姜（・甘草）が配合されている。

内因の寒証

生体の色々な機能が低下する（陽虚、虚寒）とか、循環状態が悪くなって（瘀血）、温める機能が落ちた状態であるとか、湿証（水肥り）で浮腫のために冷え症であるといった者は、慢性的な寒証がある。これを「内因の寒証」と捉える。そしてまた、気虚・陽虚が内因になる者は、外界からの寒冷（寒

邪)の影響を受けやすい。

例えば、冷たい物を飲んで腹が痛くなるとか、下痢するとかというのは中寒の一つであるが、普通の者なら起こりにくく、この体質者の場合、ちよつと冷たい物を飲んでも下痢や腹痛を起こしやすい。

原因による「寒証」の病態分類	
外因の寒証＝中寒 外部環境の寒冷刺激により発症する寒証	経絡の中寒(表) ……身体外表の寒証 寒冷刺激が四肢・軀幹など外表(経絡)を侵襲 ……五積散、当帰四逆加呉茱萸生姜湯
	臓腑の中寒(裏) ……内臓の寒証 上焦の寒証……小青竜湯、苓甘姜味辛夏仁湯 中焦の寒証……人参湯 下焦の寒証……苓姜朮甘湯
内因の寒証＝陽虚(虚寒) ……気虚に起因する寒証 体質的に陽虚の者が発症する全身性の寒証(エネルギー代謝の低下) ……人参湯加附子、真武湯 (その他) 瘀血体質(動脈・静脈の血流障害) ……局所的な寒証 湿証(水太り) ……浮腫・水滯による寒証	

29

お腹の冷えや、冷えによる下痢・腹痛・嘔吐には、
お腹を温める(温裏)作用の「乾姜・蜀椒・呉茱萸」
の配合された処方(人參湯・大建中湯・呉茱萸湯)
を中心に加減して用いよ。

乾姜—甘草 ……温裏作用(臓腑を温める)

乾姜・甘草の配合された処方は臓腑(=裏、核、nucleus)を温める。乾姜が主にお腹を温めて、冷えによって起こる腹痛、下痢、悪心、嘔吐を治す。甘草は冷えによる腹痛を治すために乾姜と合わせて用いられる。

臓腑の中寒(お腹の冷え)

冷たい飲食物(果物や冷蔵庫で冷やした物)を食べたり飲んだり、下肢の冷却による冷えた血液の腹腔内への流入、腹壁や腰部の冷却による腹腔内の冷えなどにより発生する。症状としては、腹痛、下痢(泥状便)、嘔吐などが最もよく診られる。これは寒冷刺激で消化管の蠕動運動や胃腸が痙攣することにより生じる。口渴はなく、尿量が多いことも大きな特徴である。治療には、服用すると腹が温まり、腹痛、下痢、嘔吐が止む温裏去寒薬を用いる。代表的薬物が乾姜で、肉桂、呉茱萸、附子などがよく用いられる。基本処方甘草乾姜湯である。代表処方は人參湯で、このほか大建中湯、呉茱萸湯、小青竜湯、苓姜朮甘湯などがある。

● Group 方剤には何がある？

人參湯、大建中湯、安中散、呉茱萸湯、苓姜朮甘湯、小青竜湯、苓甘姜味辛夏仁湯、四逆湯、真武湯、附子粳米湯

小青竜湯	乾姜—甘草(麻黄・桂枝・細辛・芍薬・半夏・五味子)
苓甘姜味辛夏仁湯	乾姜—甘草(細辛・茯苓・半夏・五味子・杏仁)
人参湯	乾姜—甘草(人参・白朮)
大建中湯	乾姜—蜀椒(人参・膠飴)
安中散	良姜—桂枝—茴香—甘草(延胡索・縮砂・牡蛎)
呉茱萸湯	呉茱萸(人参・生姜・大棗)
苓姜朮甘湯	乾姜—甘草(白朮・茯苓)
四逆湯	乾姜—甘草(附子)
真武湯	附子—生姜(白朮・茯苓・芍薬)
附子粳米湯	附子(粳米・半夏・大棗・甘草)

①上焦(肺～気道)の冷え	小青竜湯、苓甘姜味辛夏仁湯
②中焦(胃腸)の冷え	人参湯、呉茱萸湯、安中散
③下焦(お腹・腰)の冷え	苓姜朮甘湯(腰・下肢)、大建中湯(腹)、 附子粳米湯(腹)、真武湯(腹・下肢)、 四逆湯(腹・下肢)

— 人参湯(理中湯) —

(ニンジントウ/リチュウトウ)

組成 乾姜・甘草・人参・白朮**薬能** 乾姜・甘草(=甘草乾姜湯) ……裏寒、内臓の冷えを温める(温裏作用)。

人参・甘草 ……心下痞・心窩部の痛みを取る。腹痛を止める。

白朮 ……健胃作用、利尿作用(消化管の水を血中に引いて下痢を止める)。

解説

本方は『傷寒論』に「霍乱、頭痛、発熱し、身疼痛し、熱多く水を飲まんと欲する者は、五苓散之を主る。寒多く水を用いざる者は、理中丸之を主る」とある。霍乱というのは急性胃腸炎で、疫痢のように急激に経過する病気である。霍乱で嘔吐、下痢して、頭痛、発熱し、身体が痛み、脈は浮で、いくらでも喉が渇いて水を飲む。炎症性のもので熱が多く、口が渇くというものは**五苓散**を用いる。嘔吐や下痢をするが、口渇もなく、手足も冷え、腹痛があるとき、炎症でなく寒冷による場合は**人参湯**を用いる。**五苓散**の証は脱水症となって、小便はほとんど出ない。**人参湯**の証は嘔吐や下痢で水分を失っても脱水せず、口渇もなく、尿量も多い。本方は**乾姜**が冷えを温める主役で、**人参**、**甘草**は腹痛を止め、心下部の痞えを緩める。**白朮**で下痢を止める利尿作用がある。**人参湯**の**甘草**・**人参**は脱水を防ぐ作用があり、**白朮**の利尿作用は弱いので浮腫を来すことがある。

「臓腑の中寒」は飲み物、食べ物が冷たくて、即ち胃袋を氷嚢の代わりにして腹中を冷却し、あるいは下肢を冷却し、下肢で冷えた血液が腹腔内に流入し、腹を冷やして起きる。**人参湯**はこのように腹(内臓)を冷やすことで、下痢・腹痛を起こすときに腹を温めて治す方剤である。

応用

① お腹が冷えて腹痛・下痢（泥状便）するもの

その特徴は

㊸ 下痢の量は多くなく、ベタベタで頻回である

㊹ 大便、ガスは臭くない

㊺ 下痢をしても、尿量が多く、口渇はない

㊻ 口に薄い唾液がたまる

① 四肢の冷える者……附子を加えた附子理中湯を用いる。

② 下痢の水分が多い者……白朮・茯苓の配合された真武湯を合方する。

③ お腹が冷えてガスが多く、腹痛の激しいとき……大建中湯を合方する。

② 貧血症……人参には増血作用がある。鉄欠乏性貧血、胃性の貧血、抗ガン剤やコバルト照射などによる再生不良性貧血に用いる。四君子湯・補中益気湯などと同様に、術後の貧血予防に用いる。

③ 低酸症……人参には胃酸を増加させる作用がある。

— 大建中湯 —

（ダイケンチュウトウ）

組成

乾姜・蜀椒・人参・膠飴

薬能

蜀椒・乾姜……お腹を温め、腸管の痙攣・蠕動亢進を抑制する。

人参……上腹部痛・胸痛を止め、心下痞硬を治す。

膠飴……蜀椒の刺激を抑え、胃液の分泌亢進を抑制する。

解説

本方は『金匱要略』に「心胸の中、大いに寒えて痛み、嘔して飲食する能わず、腹中の寒、上衝し、皮起き出でて頭足有るを見る。上下痛みて触れ近づくべからざるは、大建中湯之を主る」とある。胸部から心窩部にかけて、寒冷の作用を受けて痛み、そのため嘔気がして飲食ができず、お腹が冷えて、腸の蠕動が亢進してまるで頭と尾があるような様子で、それ